季節の風景●7月

海水浴

雨が上がると夏の日差しがギラリ。梅雨の合間に、すっかり夏顔の太陽が照り付けています。雨が続くとなんとなくすっきりしませんが、暑いと水が恋しくなるのもまたしかり。海開きを心待ちにしていた人も多いのではないでしょうか。

四万十町を代表する興津海水浴場では、7月初旬に海開きが行われました。白砂青松の渚と、透明度の高い水質が自慢の海水浴場は、環境省より「快水浴場百選」に認定され、シーズン中は県外からも清涼を求めて多くの海水浴客が訪れます。

現代では『海水浴』というと、海で水泳をすることを差しますが、昔は健康の維持や回復を目的として、世界各国で行われていた自然治癒法であったそうです。日本でも医療のための海水浴が行われ、海水浴場は海水療法の場所として開かれていきました。

しかし、1890年代ごろから各学校の水泳部が海で練習を始めたことにより、海水浴は『海水療法』という目的から『水泳をする』という風に変わっていきました。その後、各地の海水浴場では水泳目的のための利用者が増え、大衆的な夏のレクリエーションへと発展したのです。これから夏本番！今年も暑さに負けず、元気いっぱい海水浴を楽しみましょう〜！

今月の人きらり

やって後悔するか、やらずに後悔するか　人生1回きり

竹内　修一さん
七里

本業は塗装業、ペンキ屋さんである。七里で「四万十ペンキ」と看板を上げている。18歳から弟子入りし腕を磨いた。内外装、木工塗装と何でもこなす。特に古家具の再生が好きだという。注文主の曾ばあさんの嫁入り箪笥を「昔の家具は作りがいい」と言いながら磨いていた。塗装に関してはプロだが、どうも金儲けは上手でないらしい。外からの情報によると材料代だけ請求したり、意気に感じては無報酬で仕事をしたり、といわゆる職人としての頑固があるという。ケーブルテレビでも放映された影野駅外壁塗装では、洗浄と2日間の塗装作業における技術指導はボランティアであった。

影野駅塗装完成

そんな竹内さん、国家試験である潜水士の免許取得者でもある。30を過ぎてから取得した。趣味で潜りを楽しむためではない。建設現場の一員である「工事潜水士」である。テトラポットの据付や撤去、ケーソン据付に海底ケーブル敷設、ごくまれに遺体捜索など、陸でやる作業を水中で経験してきた。命がけで沖縄から新潟までの海を潜った。氷が張っても潜水した。好きか嫌いか、ではない。ここでプロとしての意識を持ったという。愛読書の一節『命がけを自負する奴はまだ二流』ここが好きだという。

現在は海の仕事を卒業しているが、その技量をかわれ鬼ヒトデの駆除やダイビングスポット等の場所捜し、あるいは放送会社からの依頼を受けての水中撮影と忙しい身である。

人生1回きり、やって後悔するかやらずに後悔するか、それがこれからの人生の方向を決定するという。塗装に関しても、自分にしかできない技術を持つこと、それがプロたる職人だという。水中は魅力でいっぱい。時間の許す限り映像の世界でやってみたいと笑っていた。でも本業をお留守にしないで、ますますの活躍をお祈り申し上げます。